批評・紹介

蒙古源流

江實譯註

昭和十五年一月刊　四六倍版五〇三頁
弘文堂書房發行　定價金貳拾圓

江學士畢生の力作たる邦語譯滿文蒙古源流が刊行された。この本の第一卷の試譯が善隣協會の『調査月報』に載せられたのは隨分以前の事であるが、今尚その絢爛たる名文に感動させられた事を記憶して居る。月報が廢止されてから氏の名譯も中絶され、同學の間で惜まれて居た所、今度その全譯が出たのだ。手にして改めてその非凡な出來榮えには讃嘆せずに居られぬ。江學士は元々言語專攻の人であり然もこの十年間は孜々としてトルコ蒙古滿洲朝鮮の言語の研究に沒頭して居たのだから拔群の勞作である事は當然だ。誠に日頃の蘊蓄が全部この譯に傾倒されたといつてよい。學士が日夜心を碎いて精進して居るのをよく知つて居る以上專門でない私が批評する等は到底出來ない業である。唯この譯本の滿洲語學界に占むべき地位を明かにし得たらと思ふだけだ。

滿洲語が色々の意味で問題視されて來たのはこゝ數年の事だ。論文以外の刊行物としては既に羽田博士の滿和辭典、今西學士の對譯滿洲實錄があり、そして最近は藤岡博士の滿文老檔の飜譯及び江學士の蒙古源流等の大物が次々と公にされた。思ふに之等は何れもこの分野に於ては劃期的な意義が認められるものだ。

冥の國の言葉である滿洲語が現代、然も異國に脚光を浴びて現はれて來たことは實に奇現象といへよう。然し乍ら今となつては滿洲字が讀める事が出來るとか、滿洲語を知つて居るといふだけで特殊技能を誇る時代は過ぎたのだから、當然他の學問の分野に於けると同樣の水準を以て臨まねばならない樣に思へる。

曾つて本誌三卷三號に石濱純太郎先生が羽田滿和辭典を紹介された時、滿洲語研究の動向を概觀されその將來に關して極めて明快的確な指針を垂れられた。然しそれはかなり抽象的なお話と思へるので私は主として實際上の立場から滿洲語研究の方法を抽き出して見たいと思ふ。さうすれば江學士の研究の意義も自ら判

明する樣に考へられる。

古典滿洲語の研究は現在の所支那の書物に依る以外にその端緒を見出し得ないであらう。次にその譯を述べる。此の際斷つておかねばならぬ事はこの古典滿洲語と云ふのは主として「書かれる言葉」としてのそれを意味する。

大ざつぱにいうて滿洲語の發達は二つの時期に分られると思ふ。卽ち滿洲語自體が成長を示した時期と、成長が終つて形骸のみを傳へた時期とである。その分岐點を凡そ乾隆時代に見出し得る。傳說であるが兎も角ヌルハチが滿洲字を創定して後滿洲語が書かれる言葉としての使命を負はされた。勿論書かれるというてもその必要は官の文書類で、いはゞ公用語であらう事は想像つく。それ以前は彼等內の文字に携はるもの或は敎養ある貴族の間では蒙古文が使はれて居た。だから滿洲語の形成は全く蒙古語に依ると思へる。それで滿洲語が大體書かれる言葉としての體裁を備へるには暫しの年月を要して「かゝれる言葉」としての機能は漸く二代天聰汗の代に入つて發揮し始めたらしい。それまでは原稿は蒙文で書かれ、それを滿文に直したものであらう。建州見聞錄に『胡中只蒙書を知る凡そ文簿は皆蒙字を以て之を記す』とある通りだ。その時代の產物として見出されるものは『古語で記された滿文老檔』である。而して滿洲語の文脈は日增しに整備され遂に滿洲人の手になつたユニークな、然も文學的とも言ひ得る作品がかゝれた。それが滿文太祖實錄並に戰圖だ。之は實錄といふけれど明實錄又は淸朝の後の實錄に見られる政書の類でなくヌルハチの功を讚へた一種の英雄讚仰錄である。だが彼等の手になつたといふこの太祖實錄の叙述の中にも明瞭に支那人の思想、表現形式を模倣して居ることは注目に價する。而してかういつた作品は後を絕つて、之以後滿洲語は滿洲人が文化的敎養を吸收する手段としての言葉に轉じ、從つて多くの飜譯がなされた。その代表的作品は恐らく滿文金瓶梅であらう。之は康熙年間に刊行されたのであるが、この朝を頂上として以後滿洲語は文化吸收の役目もなくなりかけてこゝに言語の成長も終つた樣に思へる。然して乾隆期に入つてからはそれ迄の重要な滿洲語の文献は大部分整理された。恰も期限の切れた書類を整理し、まとめて書庫にしまふ如くに。そして例

へば『古語で記された滿文老檔』は乾隆時代では既に讀解が容易でなく『無圈點字書』『舊清語』等の古語の字解といつた樣な副產物が作られた有樣である。

乾隆時代に整理編纂された代表的な滿語文献を見ると、先づ辭書では增訂清文鑑(羽田辭典の底本)、乾隆鈔本滿文老檔(藤岡博士譯の底本)、滿洲實錄(今西譯の底本)等がある。

この朝以後文献滿洲語は皇帝の趣味になる飜譯、漢人の科擧に必要な語學、勅選の書並に官文書の類が滿漢二體を備へると謂ふ制度の故に保存された樣に思へる。江學士譯の蒙古源流は乾隆帝の博學を證明する爲に飜譯された代表的なものである。

科擧の必須課目として滿洲語が必要になつて、こゝに始めて漢人の爲の系統的な滿語入門書が作られた。清文啓蒙等がその典型的なものだ。石濱先生が指摘された所に依ると、歐人の數ある滿語研究もその系統は殆ど清文啓蒙に出で、それを一歩も出て居ないとの事だ。現在吾等が手にし得る文典中最も簡にして要を得て居るメルレンドルフの滿語文典はこの清文啓蒙に基いて居る。

以上の事から滿語の研究は先づ乾隆期の支那書の文典辭書より出發せねばならぬことが分るであらう。

次に滿語研究の上より見た滿漢對譯書の譯文的價値に就いて一言しよう。滿文老檔、無圈點字書、舊清語等を除く太祖實錄、蒙古源流以下の諸書は凡て滿漢蒙の三體になつて居る。この對譯に使用されて居る漢文は、從來正統の漢文から見て破格の文章とされて、この漢文譯の內容すらが疑はれる向きが往々にしてある。それは誤解だと思ふ。勅選の飜譯に携はる人々が漢文が出來ないとは考へられない。恐らく日本在來の漢學者のどれよりも名文章家であつたらう。それが破格の文章を書いたことには皆謂れがあるのだ。明以後支那周邊の國々との接觸が增すにつれてそれ等の國々の言語が支那人によつて研究された。司譯監が設けられ華夷譯語が編纂された。まして異域より起つた清朝が異域の語を尊重した事は當然だ。五體清文鑑以下數々の外國語研究書が出た理由でもある。飜譯に洗練を加へ異域の語を忠實に傳へる爲に文章の破格が强ひられる事は極めて自然である。滿文を譯した漢文を逐字檢討すれば如何に周到に忠實に且つ名調子を傳へて居るか

といふ事に驚嘆するであらう。

かくて滿語研究は全ての點よりして支那の書物から出發せねばならぬ事を重ねて强調せねばならぬ。ガベレンツの滿獨辭書は、清文鑑、清文彙書に對し獨自の語彙を持つて居る。之は滿漢合璧四書を精確に研究した事に依つて成功した産物である。

以上滿洲語の發達と考へ、その途上に現はれた文献を記載する事に依つて研究の方法を極めて大まかに抽出した積りである。即ち乾隆期の滿洲語を譯出した滿漢合璧書の代表的文献を先づ調べて滿文の文脈語義を正し、次に舊清語等によりて太祖實錄を極め、更に歩をすゝめて無圈點字書等により滿文老檔にすゝむべきであらう。

江學士の蒙古源流の翻譯は實に右の方法に合致する基礎的研究の所産である。滿文蒙古源流は乾隆帝の命により蒙古文より譯出されたものであるが、その滿文が書かれる言葉としては文運隆盛の時期を反映して洗錬を極めたものと想像されるし、又その漢譯にそつがあらう筈がない。この故に江學士は源流を滿洲語研究の爲のテキストに選んだものと思はれ方に理の當然と考へられる。

こゝに到つて江學士の著書を紹介せねばならぬ。

同書は最初に和文の全譯が載せられ、次に蒙古源流の書誌的考察、更に源流の漢文テキスト及び滿文テキスト注、索引の順で編まれて居る。

さて私がこの書を批評する立場の重點は主として次の事だ。即ち同書が翻譯である以上譯文に凡ての價値が係つて居て、それ以外の附錄の研究は別問題であるといふ事だ。即ちこの種の翻譯は落合博士の高說の如く、幼稚は許されても誤謬は咎められる可きであらうし、更に譯文は先づ日本語として筋が通つて居なければならぬ。その後で更に原文の調子を讀者に髣髴たらしめる爲に口語體にするとか、文語にするとか、詩的表現をとるか散文的にするかを決める可きであらう。かういふと簡單だが從來の翻譯は凡てこの點が極めて曖昧の樣に思へる。

學士の譯は極めて正確だ。譯語を見ると清文啓蒙、虛字指南、清文總彙、清文鑑、高橋景保の散語解、ガベレンツ、ザハロフ、アミヨ等が各々長短を比較取捨されちやんと所を得て使はれて居る。從來文典等にて

說かれた動詞の語尾變化は極めて粗末なものであつたが學士の手によつて數ある變化の差異が可なり明確に整理されて、例をあげると學士によつて喚起された問題の me.fi の形の研究等はよく行き屆いて居る。此等の形は從來皆同じ意味に用ひられたものである。一事が萬事、かういつた結果は到る所見出される。

更に漢譯こそ先づ從ふべきであるといふのが又學士の立前だから、此の度の譯文には周到にその心構へが見受けられる。

滿文蒙古源流は元々原典は蒙文であるから、意義の不明確な所は原典によるべきは勿論だ。蒙文に熟達せる學士はシュミツト本、喀喇沁本、殿版の蒙文を參照し、更にシュミツトの譯を徹底的に調査した樣である。その結果は悉く學士の譯文の內に結晶されて居る。

以上によつてその譯の正確さを充分に期待し得るであらう。

而して學士の譯文は我が國飜譯界に於ても屈指の名文であらうと思はれる。昭和の御代には少し古めかしくて太平記張りの美文である。學士は源流を古典文學作品と見做したが故に叙事詩めいた表現をとつたのであらう。源流の文中頭韻を踏んである詩譚の類には譯文も亦頭韻が踏んである程に凝つたものである。然し瑕瑾もそこに見受ける樣だ。譯語も少し晦澁に過ぎて一讀判明せぬ感がある。殊に第一卷の所が目立つ。こゝは天地開明を說いた所で原文を見ると、成程まじなひ文の樣に意味が模糊たるものであるが漢譯によると可成り明快さが增す樣に思へる。從つて譯語も漢譯より選んだ方が成功の率が多い樣に見受ける。だがそれは少し慾ばつた注文かも知れぬ。

次に滿漢テキストの採錄の意味であるが、漢文は最高の名譯として廣く參考されたいとする學士の老婆心から出たものである。滿文はローマナイズを避けて滿字で認められた。それは以前にベルリン大學のヘーニツシュ博士が滿文をローマナイズしたものを刊行されたが、之は數百ケ所の誤讀誤字脫字があるので此の誤りを正し且つ音譯法の不備なローマナイズ式をやめて原文を出したものであらう。然し一層の事『カタカナ』で音譯して貰つた方がよかつたかも知れぬ。

源流の書誌的考察に就いては、私は何も知らないから書き樣がない。專門家の方に任す事にしよう。

以上極めて雜駁な紹介をし却つて學士の力作を害ふかを恐れるが、何れ多くの時間を得て丹念に熟讀し、再び筆をとる積りである。

斯くて滿洲語界にも最高の譯書を得た譯で充分慶賀されてよく、且つ滿洲語研究の水準の高さを誇り得ると思ふ。

私は江學士の譯を紹介するに當り、他の勞作卽ち羽田辭典、藤岡博士譯滿文老檔、今西學士對譯滿洲實錄を詳細に紹介批判する積りであつたが、充分な用意と暇がなかつた爲に、果し得なかつた。何れ果す積りである。〔三田村泰助〕

蒙古世系譜

民國二十八年八月排印五卷一册二十七葉

私はこの書物に就いて語る何等の智識も持ち合はせてゐない。私は本書に就いては、張爾田氏が「蒙古源流と大差ない、唯十二强汗の名のみは、この書がひとり具有するところで、或は元初掌故者の一助ともならうか」との意味を述べてゐる以外、まことに何も知らないのである。たゞかつてこの書物が私の近邊で相當騷ぎ求められたといふことゝ、それから西齊雜著二種の著者である蒙古人博明がこの書物を有つてゐたといふことの故にのみ、從來寫本でしか傳はらなかつた本書が、今度北京で印刷になつたといふことだけを紹介しておき度いのである。

私がこの書物の希珍なものであることを敎へられたのは（重要なものと仰言つたかどうかは今思ひ出せない）故內藤湖南先生からで、たしか昭和九年はじめ頃のことだつたかと思ふ。それは丁度先生がこの本を手に入れられたときで、私は怠けて一向しなかつたが、同學三田村君はこの本に就いて色々先生に質してゐた樣だ。間もなく先生はおなくなりになつたのだが、おなくなりになつてから、先生はあの珍本を御所藏になつてゐた、是非見ずんばある可からずといふ樣なことで私近邊の勉强家達が騷ぎ出した。騷いだが、あの先生の幾百萬卷からの御藏書の中からは、たつた一册ペラ〳〵とこの本はどうしても出て來なかつた。それから五六年經つて今年の夏末、東大の和田先生が研究上の御要務で當地にお出でになつた。一日先生のお伴をして燕京大學の鄧文如敎授を訪問した。たま〳〵和田